

連載
国語と
外国語の
よりよい関係

1

国語科と外国語活動・ 外国語科との連携

平成三十二年度から全面実施（三十年度から先行実施）となる、第三・四学年の外国語活動と第五・六学年の外国語科。本連載では、国語科との連携という視点から指導内容を考えていきます。



京都外国語大学教授 森 篤嗣
1975年、兵庫県生まれ。国立国語研究所准教授、帝塚山大学教授などを経て、現職。国語科教育だけでなく、外国語としての日本語教育の研究にも従事する。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。

国語と外国語の「言語」としての共通点

新学習指導要領での外国語科を論じる前に、まずは現行学習指導要領（平成二十年三月告示）における「言語活動」を振り返ってみましょう。ここでは、言語及び非言語による学習活動を「言語活動」として重視し、その充実を図っています。このときの「言語」とは広義の「言語」であって、日本語及び英語という個別言語はもとより、多くの言語に共通に使用される数字や音符なども含むとされています。

すなわち、広義の「言語」という概念においては、日本語も外国語も等しいということになります。もちろん、日本人の場合でいえば、母語である日本語と、外国語である（例えば）英語は異なる点も多くあります。しか

このように、挨拶一つとっても、日本語にあって英語にない（英語にあって日本語にない）のは当然で、それは言語の背景には文化が存在するからだということを学ぶ機会になればと思うのです。

言語能力の向上に関する特別チーム

中央教育審議会教育課程部会では、平成二十七年八月二十六日に、「次期学習指導要領改訂に向けた検討体制」として、国語ワーキンググループと外国語ワーキンググループにまたがる形で、言語能力の向上に関する特別チームを立ち上げ、議論が重ねられてきました。

そして、平成二十八年八月二十六日に、「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」が報告されました。ここでは、その概要を確認しておきたいと思います。

言語能力を構成する資質・能力

- i 知識・技能
- ii 思考力・判断力・表現力等
- ①創造的・論理的思考の側面
- ②感性・情緒の側面
- ③他者とのコミュニケーションの側面

し、共通する点も実に多く存在するのです。まずは教師自らが日本語も英語も「言語」であるという共通性を認識してほしいと思います。

言語の背景にある文化を見通す

言語に関する教育を取り扱うときに、絶対に見落としてはいけないことは、言語と文化が表裏一体の存在であるということです。例えば、外国語活動でも扱われることが多い挨拶について考えてみましょう。

「こんにちは＝Hello」や「おはようございます＝Good morning」などの挨拶を学習し、教室でも元気に交わすことになると思います。このとき児童は「日本語にある挨拶は英語にもあるんだ」ということを当然のよう

学びに向かう力・人間性等

このように項目を羅列するだけでは十分に理解することは難しいですが、少なくとも「知識・技能」は全体の一部に過ぎず、言語能力をもう少し広範なものとして捉えようとしていることがわかります。

言語能力を構成する資質・能力が働く過程

- 「認識から思考へ」
- ①テキスト（情報）を理解するための力「思考から表現へ」
- ②文章や発話により表現するための力

「認識から思考へ」と「思考から表現へ」というのは、一方向的な流れではなく、循環的に繰り返すイメージであるとのこと。詳しくは、言語能力の向上に関する特別チームの「言語能力を構成する資質・能力が働く過程のイメージ（資料2）」もご参照ください。

これらの「認識から思考へ」と「思考から表現へ」という循環の根底には、先ほどの「言語能力を構成する資質・能力」における「学びに向かう力・人間性等」が基盤となるとされています。

指導内容・指導方法における連携について

抽象的な解説になっしまいましたので、具体的な指導に戻して考えたいと思います。国語科と外国語活動・外国語科において、指導内容・指導方法における連携という場合、具体的に何ができるでしょうか。

まずは先ほど挙げたように、「挨拶」など同じ題材を国語科と外国語活動・外国語科で同時期に扱うということが考えられます。または、題材そのものではなく、プレゼンテーションやディベートのように、同じ種類の言語活動を扱うことも可能です。ただし、日本語でできることと同水準のことはできませんので、工夫は必要になります。

もしくは、「スイミー」や「お手紙」のような外国語作品における原文を利用するという方法もあるでしょう。もちろんこの場合も、英語での原文をそのまま与えるのではなく、「実はこのように表現されています」といった解説が必要であり、「表現を味わう」ことが目的になります。その点では、新学習指導要領の「知識及び技能」と関連させながら指導することも考えられます。

次回以降、より具体的な例を挙げながら、国語科と外国語活動・外国語科の連携について取り上げていきたいと思います。